企業向けセミナー

ワーク・ライフ・バランスで 業績アップ！

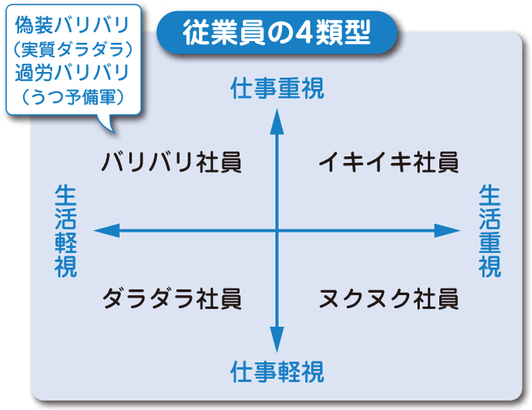
中小企業こそワーク・ライフ・バランスを実現できる！

渥美由喜（あつみ なおき）さん講演要旨

葛飾区は東京商工会議所葛飾支部との共催事業として「ワーク・ライフ・バランスで業績アップ！」セミナーを平成24年11月7日、テクノプラザかつしかで開催しました。「中小企業こそワーク・ライフ・バランスを実現できる」と熱く語った講師の渥美由喜（あつみ・なおき）さんの講演要旨を紹介します。

私は従業員を仕事も生活も重視する「イキイキ社員」、生活は重視するが仕事を軽視する「ヌクヌク社員」、仕事を重視し生活を軽視する「バリバリ」社員、仕事も生活も軽視の「ダラダラ社員」の４つに類型化します。ワーク・ライフ・バランス（WLB）はイキイキ社員を増やすことです。

バリバリ社員の何が悪いと思うかもしれませんが、これには「偽装バリバリ」と「過労バリバリ」があります。偽装バリバリ社員は夕方までダラダラしていて、残業代のつく夕方から急に「がんばっているぞ」とアピールする社員。残業代が固定給のようになってしまいます。過労バリバリ社員は優秀なエース社員で、どんどん仕事をつけられてしまう。うつ病などメンタルの問題で長期出社できなくなるリスクを抱えています。偽装バリバリはなくしましょう、過労バリバリは守りましょう、イキイキ社員を増やしましょう。



WLBに取り組む職場と取り組まない職場 2か月後の業績は対照的

福岡県の薬局チェーンでWLB実現のお手伝いをしました。２～３人の零細店舗で夕方からお客さんが多く、ＷＬＢなんて無理だという店舗とやってみようという店舗に分かれました。やってみようという店舗ではお客さんが多い時間帯はローテーションを組んで、それ以外の時間帯は柔軟に働けるようにしたところ、従業員のモチベーションが非常に上がり、てきめんに対人サービスの質が上がりました。WLBに取り組んだ職場と取り組まない職場とでは２か月後の売り上げで対照的な結果が出ました。WLBをやればやるほど業績が上がるのです。

今後50年で労働力人口の３分の１が消失してしまうという、どの国でも経験がないような人口減少社会に日本はいま直面しています。あらゆる職場で社員が減っていく。

介護の担い手が少なくなり、介護期間も長期化しているという問題もあります。

よく「WLBは価値観の問題だ、俺はバリバリ働いて妻は専業主婦でいいんだ」という人がいますが、そういう方の部下の中に、夫婦共働きで介護もしているという人が増えている。WLBは価値観の問題ではなく、社会システムの転換にどう対応するかという問題です。職業人、家庭人、地域人という１人３役をこなし、職場では時間あたりの生産性が高い仕事をして、個人も会社も成長していくというプラスのスパイラルに入らないと、人口減少社会に対応できません。

人口減少社会で優秀な社員を確保 顧客の信頼、経営の安定に

育児休業などで空きをつくる社員は困ると考えられがちですが、中小企業の場合、この人に辞めてほしくない、どうしたら続けてくれるだろうと一生懸命考えて、それが結果的にWLBになっているという例が多いです。

秋田県の従業員25名の部品製造業の会社は、子どもが生まれるという人生最大の幸せなライフイベントの機会に、すべての業務の無駄を見直し、社員みんなでサポートしようとしています。３歳までの育休、勤務時間短縮制度、無料の事業所内託児施設があります。従業員の士気が向上し、工場での不良品発生率が100分の１に低下しました。そうなると、部品を発注する側もこの会社でなければとなります。社員よし、顧客よし、経営よしの「三方よし」です。

私はコンサルティングをしていますが、あらゆる職場で「業務が多い、人が足りない、だからWLBは無理」という人ばかり相手にしてきました。人口減少社会では一人あたりの業務量は増えていく。業務量が倍になったら倍の時間をかけて頑張ろうという会社がありますが、恒常的な長時間労働はコストがかかり、生産性は低い。業務量が増えたら処理時間を短くするということしか生き抜くすべはないのです。

今日は一つだけ例を上げます。「やかましいの手法」と言っていますが、**や**める業務はないか、**簡**単にできる業務はないか、**真**似できる業務はないか、（他の人に）**し**てもらえる業務はないか、**い**っしょにできる業務はないかということで、徹底的に業務を洗い出します。

渥美由喜さん
東レ経営研究所ダイバーシティ＆ワークライフバランス研究部長。
厚生労働省政策評価委員など、公職多数。6歳と2歳の2児の父親。4年前から父親の介護も実践中。

WLBは人生のリスクマネジメント 介護も看護も「良かった作り」

私はふだん、平日は２人の子どもを保育園に迎えに行って、認知症の父のところに連れて行きます。次男は１歳で７時間半に及ぶ手術を受けてから、定期的に病院に泊りがけで闘病生活をしています。

子育てはやりたかったことですが、介護と看護はやりたくて始めたわけではない。WLBは生活も楽しむというヌクヌクとしたイメージがあるかもしれませんが、そうではありません。人生何が起こるかわからない、リスクマネジメントです。私にとってWLBは綺麗ごとでも机上の空論でもありません。それを実現しないと家族が幸せになれないと思って、日々格闘しています。

WLBは「良かった作り」だと思います。私は次男が生まれてきて良かった、父が長生きしてくれて本当に良かったと思うんです。「介護の次は看護か」と不幸に見えるかもしれませんが、職場の上司や同僚、家族と力を合わせて乗り越える、そのプロセスが幸せだと私は思っています。